

孤立と対話に揺れるムスリム住民

中村 尚司

1、広域アジアの一部をなす生活圏

スリランカのイスラム教徒は、通常ムスリムとして知られている。シンハラ語では、マラッカである。タミル語を用いてタンビー（弟）と呼ばれることもある。住民の多くを占めるシンハラ人やタミル人に比べて、少数派だから弟分だと、扱われがちである。宗教組織のイスラム教も、仏教やヒンドゥ教と同様か、それ以上の普遍性を持つ。しかし、スリランカでは少数派である。キリスト教徒も同じ程度に、少数派であるが、社会的な地位は全く異なる。

スリランカ社会において、植民地支配とともに、キリスト教は常に支配者の宗教だった。第一の仏教徒人口と第二のヒンドゥ教徒に比べて、イスラム教徒とキリスト教徒の人口規模は、ほぼ変わらない。キリスト教徒は、カトリックとプロテスタントに分かれ、教団組織も多様である。他方、イスラム教徒は、ひとくくりしてムスリム住民とみなされている。主要な居住地域でも、部外者には目立たない暮らしをしている。西欧から来た植民地政府の行政官は、信仰と民族を同一視し、イスラム教徒を民族集団として扱った。独立後の今日も変わらない。シンハラ人やタミル人の場合、仏教徒やヒンドゥ教徒に限らず、キリスト教もそれなりに広がっている。ムスリム人の場合、民族性はそのまま、信仰のあり方を決めている、とみなされている。民族集団としてのムスリムは例外なく信仰という点では、イスラム教徒である。ムスリム社会の一員に生まれると、避けようもなくイスラム教徒という現実を引き受けなければならない。

職業上の制約も少なくない。たとえば、18世紀中葉のオランダ植民地時代まで、長い間農業部門から排除されてきた。自他ともに、商業に従事することが、ムスリムにふさわしい生き方である、とみなされてきた。スリランカ特産の猫目石やブルーサファイアの宝石商は、ムスリム住民の主要な職種である。とはいえ、ユダヤ教徒のように、金利を取って金貸し業をすることは許されない。8世紀のバグダードを舞台に描かれた「船乗りシンドバッド物語」は、シンドバッド（インドの風）という名前が示唆するように、アラブ世界と南アジアの交易が主題である。セレンディーヴという、スリランカのアラブ名も登場する。象牙、宝石、真珠などのスリランカ産物が取引される。

スリランカのムスリム住民の出自は、多様であり、単一の出身地を特定することはできない。彼らの母語がタミル語であることを考えると、南インドからの渡来人が多い。そのインド・ムスリムもアラブ世界との交流が日常的に行われていることを考慮すると、チグリス・ユーフラ

ティス流域から直接スリランカに来るか、インド大陸を経由するかどうかは、あまり大差なさそうである。インド・ムスリムこそ、スリランカ・ムスリムの母体である。インドを経由せずにスリランカに来住するムスリムの多くは、モルデイヴ経由である。イブン・バトゥータのように仏教国からイスラム改宗したばかりのモルデイヴから旅した記録を残している人もいる。カツオ節文化などスリランカとモルデイヴしか、共有していない文物もある。しかし、質も量も共にインド・ムスリムの影響力には及ばない。

インド・ムスリムの社会文化は、この島国にカースト制の影響をもたらした。本来、イスラムの信仰はカースト制になじまないが、割礼の担い手を決めるには便利なシステムである。スリランカ・ムスリム社会では理髪師のカーストであるオスタは、内婚制のもとにあり、他のカーストとの交流が乏しい。とりわけ、女性の割礼を担当するオスタ女性は、非常に狭いカースト制約のもとに生きている¹。

他方、中国のイスラム教徒が、島国のスリランカ社会を外部世界に開かせた役割も小さくない。1405年から7次に及ぶ鄭和の大艦隊は、スリランカを越えてインドの西海岸からアラブ世界や東アフリカまで交易をおこなった。司令官の鄭和自身もイスラム教徒であったが、当時としては想像を絶する巨大商船（長さ150メートルx幅62メートル）を六十隻隻連ね、乗組員二万数千人に上った大艦隊は、同時代のシンハラ王朝を驚嘆させた。大西洋を横切ったコロンブスの船隊以上に、大きな規模であった。これを契機に、シナモンなどスリランカの香料は、東西交易の注目を集めるようになる。

2、分散した集住地域と出稼ぎ労働

9世紀前後から、スリランカへのムスリム住民の渡来が始まり、切れ目なく今日まで続いている。はじめは西海岸のアンバラングダ、ベールワラ、ハラールワタ、プッタラム、マンナールなどでの定住が進んだ。海外との交易の担い手として、自然な定住である。やがて南部や東部の沿海地域が続いた。ゴール、マータラ、ハンバントタ、カルムナイ、アンパーラ、マダカラプア、ムトゥールなどである。しかし、キリスト教を受け入れないムスリム住民は、ポルトガル領やオランダ領時代に、人口希薄な東部地域や内陸部に追われることが多くなった。孤立化も進んだ。

内陸部のマーワネッラ、マータレー、ラトナブラ、ガンボラ、ハプタレ、アッカラパットゥなどへの定住には、それぞれの地域事情がある。マーワネッラのムスリム住民は、オランダ東印度会社の警察官として来島したジャワ人の子孫である。今でもマラユ語を話す人たちがいる。マータレーには、香料の栽培と輸出に関連した事業の担い手が多い。ラトナブラのムスリムは、

宝石に採掘、加工、販売、輸出に従事している。ガンボラやハプタレの穆斯林はプランテーション関連の産業に従事する住民である。

穆斯林住民は、子沢山で知られている。シンハラ人の政治家から「家族計画に消極的である」という批判も受けている。人口統計によると、1911年に26.3万人（うち3万人はインド・穆斯林）だった穆斯林人口は、2012年には187万人に増加した。総人口に占める比率も、6.4%から9.2%と、他の民族を凌駕している。19世紀後半には穆斯林・ブルジョワジーの形成が進み、1917年に非ヨーロッパ人のプランテーション所有者のなかで、40名を占め、シンハラ人300名、タミル人75名に比べて、人口比的には遜色のない地位である²。

スリランカの島内各地に分散した穆斯林住民の集住は、1960年代に始まる西アジア諸国への出稼ぎ労働までは目立たない形で進んでいた。所得水準も他の民族集団と変わらなかった。しかし、1970年代以降西アジアからの送金が、穆斯林居住地区で壮麗なモスク建設や学校の建物を達成すると、羨望の眼差しを受けるようになる。西アジアへ向かう出稼ぎ労働者の絶対数は、シンハラ人やタミル人の方が多い。しかし、下層労働者の場合、イスラム教徒の方が、シンハラ人やタミル人よりも優遇されることが多い。

穆斯林住民は、母語がタミル語であるという事情から、シンハラ語教育を重視する独立後の教育政策の下で、それまでは公教育に熱心とは言えなかった。しかし、西アジア諸国で遭遇するインドやパキスタンからの出稼ぎ労働者たちとの交流から、公教育の重要性を強調する人びとが増えてくる。海外留学を目指す青年も、増加してきた。西アジアにおいて、仏教徒やヒンドゥ教徒に比べると、就業条件は恵まれているが、労働市場では信仰よりも資格が優位になる。看護師や医師を目指す若い穆斯林が増えている。

3、シンハラ・タミルの両民族の共存と抗争

1915年5月、ガンボラで始まった穆斯林のモスクとシンハラ仏教寺院の間の抗争が全土に広がった。シンハラ仏教徒の祭礼行進が、モスクの前で太鼓の大きな音を立てることに、穆斯林住民が裁判所に差し止めを求める訴訟を行なった。下級審ではシンハラ寺院に有利な判決だったが、最高裁判所では、モスクの主張を容認する判決が出された。それを契機に、多くの穆斯林商店やモスクが襲撃されたり、仏教寺院が破壊されたりする抗争が大きくなった。

ヨーロッパにおける第二次世界大戦の最中という事情もあり、イギリス植民地政府には治安維持に要する軍事力が乏しかった。戒厳令が布告され、英領インドのパンジャブ連隊が導入され、暴動を強権的に鎮圧した。軍事力の行使による民族対立の鎮圧は、100名を超える戦死者を出すなど、地域住民に大きな犠牲を強いる結果となった。地域の住民として、歴史的に平和

共存を続けてきたイスラム教徒と仏教徒が、独立後は対立抗争に向かうという大きな傷痕を残した。

1948年の政治的な独立の達成以降、21世紀初頭までのスリランカの社会経済は、シンハラ民族とタミル民族の対立抗争が主調音となり、ムスリム住民の主張が表面化することはなかった。母語が共通のタミル語にもかかわらず、ジャフナ半島を実効支配していた「タミル・イーラム解放の虎（LTTE）」は、ムスリム住民を孤立させ排除する政策を採用し、北部でも三つ巴の対立構造が生まれた。

スリランカ社会において、シンハラ・ムスリムの民族抗争が、改めて登場するのは「タミル・イーラム解放の虎」が、軍事力によって鎮圧されてからである。イスラム教徒のハラール食品証明に反対する Budu Bala Sena（仏教の力を持つ兵士）が、ムスリム商店を襲撃し、略奪しはじめたのである。シンハラ民族主義に対するムスリム青年の不満は、徐々に高まりつつある。

タミル民族主義の影響を受けて、ムスリム青年の武装化も進んだといわれる。インド政府の諜報機関によれば、M.H.M.Ashraf 港湾・復興担当相が、ムスリム青年を東部州のムトゥールに集めて武装蜂起の訓練をしていた、との風説もある。2000年9月16日に、その運動を率いた指導者のアシュラフが航空機事故で死去するとともに、ムスリム民族主義の過激化も終わったかに見えた。

シンハラ・ムスリムの民族抗争が、改めて登場するのは「タミル・イーラム解放の虎」が、軍事力によって鎮圧されてからである。イスラム教徒のハラール食品証明に反対する Budu Bala Sena（仏教の力を持つ兵士）が、タミル民族に代わり、都市のムスリム商店を襲撃し、略奪しはじめた。このような背景のもとで、シンハラ民族主義に対するムスリム青年の不満は、徐々に高まりつつある。出稼ぎを通じて、西アジアのイスラム過激派との交流が増えたことも新しい特徴である。

2016年11月、スリランカ政府の法務大臣が、議会で「ムスリム住民の4家族から32名が、西アジアのIslamic Stateに参加した」という報告を行った。しかし、大臣が反ムスリムの仏教集団に近い政治姿勢だったこともあり、この発言はあまり重視されなかった。

4、2019年イースターの自爆攻撃

連続爆破攻撃が、2019年4月21日、スリランカの最大都市コロンボなど3都市のキリスト教会や高級ホテルなど8施設で起こり、日本人女性1人をふくむ250人を超える犠牲者を生んだ。実行犯はナショナル・タウヒード・ジャマート（NTJ） タウヒードは「一つにする」の意味で、神の唯一性およびその神の下でのイスラム教徒のジャマート「共同体」を指す）という地

元のイスラム過激派組織であり、動機は、キリスト教徒をイスラム敵視の欧米勢力と同一視してのことであった。

自爆した実行犯 9 人の多くは裕福な家庭の高学歴の持ち主で、英国や豪州に留学した者や、西アジアへ渡航した者もいる。イスラム教徒ゆえの疎外感を背景に、それらの地から厳格主義の思想を持ち帰り、過激化の土壌をつくったとされる。スリランカの教会やホテルなどで 21 日に起きた連続爆発事件で、政府当局は事前に犯行に関する情報をインド政府から受け取りながら、対応を見送っていた。

LTTE は 2008 年まで、自爆攻撃を継続的に行ったことで、広く知られている。しかしながら、ムスリム組織による大規模な自爆攻撃は、今回が初めてである。国外からの協力が無い限り、今後も続くとは考えられない。スリランカのムスリム住民は、歴史に登場して以来、孤立と交流のはざまを揺れ動いてきた。長くスリランカ研究に従事してきた私には、将来ムスリム住民が自立的に自爆攻撃の方針を行うとは考えられない。

¹ Asiff Hussein, *Caste in Sri Lanka: From Ancient Time to the present Day*, Neptune Publication, Battaramulla, 2013, p.390

² Kumari Jayawardena, *Nobaodies to Somebodies: The Rise of Colonial Bourgeoisie in Sri Lanka*, Sosial Scientists Association od Sri Lanka and Sanjiva Books, Colombo, 2015, pp.221-222.